

- 11) Shimuta M, Ishikawa T. Periodic synaptic currents and their integration in neurons in the pontine nuclei. 90th Annual Meeting of the Physiology Society of Japan. Tokyo, Mar. [J Physiol Sci 2013; 63(Suppl.1) : 186]

IV. 著 書

- 1) 初山俊彦訳. 第三編. 中枢神経作用薬 10. 中枢神経興奮薬. 柳澤輝行 (東北大), 丸山 敬 (埼玉医大) 監訳. イラストレイテッド薬理学. 原書 5 版. 東京: 丸善, 2012. p.150-60.
- 2) Kawamura M Jr, Ruskin DN¹⁾. 4. Adenosine and autocrine metabolic regulation of neuronal activity. In: Masino S¹⁾ (Trinity Coll.), Boison D (Legacy Res. Inst.), editors. Adenosine: a key link between metabolism and brain activity. New York: Springer, 2012. p.71-85.
- 3) 石川太郎, 初山俊彦, 遅いシナプス後電位. 田中啓治¹⁾, 御子柴克彦¹⁾ (理化学研究所) 編集委員長. 脳科学辞典 (<http://bsd.neuroinf.jp/wiki/>). 2012.

病 理 学 講 座

教 授: 羽野 寛	人体病理学: 特に肺・肝の臓器病理学
教 授: 福永 眞治 <small>(病院病理部へ出向中)</small>	人体病理学: 診断病理, 軟部腫瘍, 産婦人科腫瘍
教 授: 酒田 昭彦 <small>(病院病理部へ出向中)</small>	人体病理学: 特に肝とリンパ網内系の病理
准教授: 鈴木 正章	人体病理学: 特に泌尿生殖器・乳癌の病理
准教授: 池上 雅博 <small>(病院病理部へ出向中)</small>	人体病理学: 特に消化管の病理
准教授: 千葉 論	人体病理学: 特に肝・骨髄・循環・膝・胎生形態学の病理
准教授: 鷹橋 浩幸	人体病理学: 特に泌尿生殖器, 分子病理学, 診断病理学
准教授: 野村 浩一 <small>(病院病理部へ出向中)</small>	人体病理学: 特に婦人科の病理
講 師: 金網友木子 <small>(病院病理部へ出向中)</small>	人体病理学: 腎生検組織を中心とした形態的解析
講 師: 原田 徹 <small>(病院病理部へ出向中)</small>	人体病理学: 特に呼吸器疾患, 肝疾患
講 師: 鹿 智恵	がんの発生・進展に関連する責任遺伝子の検索: 特に肝癌, 肺癌
講 師: 小峯 多雅	人体病理学: 肝臓, 腎臓の三次元的構造解析

教育・研究概要

I. 肝臓に関する研究

1. 非アルコール性脂肪性肝炎 (NASH) に関する研究

NASH の precirrhotic stage においてその組織傷害が時間の経過とともにどのように変化していくかについての研究を前年度までに行なってきた。この研究は 3 次元的に肝を観察することによって行った研究であるが、肝に惹起された線維化と血管の走行が如何に変化するかに注目した研究でありこの結果をまとめ雑誌に報告した。その要点は、中心静脈周囲におきた線維化が進展し、隣接する中心静脈周囲の線維化と統合し線維性架橋を形成する。これが肝全体にわたって進行すると、結果的に門脈域を囲むような線維化が形成されることになる。この stage においても中心静脈域と門脈域との線維性架橋は少

数箇所で見られるにすぎないが、これは門脈の血管構築が実質区間においても傷害が少なく、保たれているからと考えられた。経過中中心静脈周囲の線維化域には動脈が発達してくるが、これは明らかに門脈域の動脈に起源を持つことを見出した。

NASHにおける肝細胞のバルーニング変性は症例により発生その頻度にバラつきがあった。バルーニング変性は小葉中心域、線維化巣周縁が目立つだけでなく、小葉中心域-門脈域間線維性架橋域でも認められた。このことから、NASHにおける線維化の進展は、炎症に伴うものだけではなく、バルーニング変性に伴うものがあることが示唆された。NASHにおいては炎症性変化が比較的軽度で、散発性であることを考慮すると、線維化に先立ってバルーニング変性が起きることが線維化の機序として重要であると考えられた。

2. 肝炎ウイルス感染のない症例に発生する肝細胞癌 (NBNC型 HCC) の背景肝に関する研究

NBNC型 HCCの36例を用いて、HCC部以外の肝の病変に関して既往歴や病理組織像を中心に検索した。その結果、アルコール多飲・NASH・肥満・糖尿病など生活習慣病の関与が指摘出来た一方で、肝線維症や肝硬変のように組織改変が強い病変、非特異的軽度肝傷害を有する病変、ほぼ正常な肝臓症例も多くみられた。すなわち、背景病変は多岐にわたることが判明した。

3. 肝細胞癌の発生・転移過程における PROM1 (CD133) タンパク質の発現の検討

ヒト胎児と成人の正常肝細胞あるいは非腫瘍性肝細胞において、PROM1タンパク質が恒常的に発現していることが明らかになった。正常肝臓において発現しているPROM1タンパク質は、肝細胞が癌化する過程において、減弱または消失していた。PROM1が本来の生理学的機能を喪失することにより、肝細胞癌が発生してくる可能性が高いと考えられた。一方、肝がん転移の過程においては、PROM1には明らかな発現変化が認められなかった。したがって、PROM1と癌転移とは直接的な因果関係はないと考えられた。

4. 閉塞性黄疸における増生細胆管の起源に関する研究

早期例(発症14日まで)では、門脈域周辺に細胆管が出現し、一方で肝細胞索と、他方では時に既存の小葉間胆管と連続している。後期(発症14日以降)では、細胆管は増生を続け線維化も加わる。古い細胆管は線維化域内に取り込まれ、既存の小葉

間胆管に類似してくる。これらの形態学的現象を踏まえ、CK7, Hepatocyteのマーカーにより免疫組織化学的に検討した。基本的に細胆管はCK7陽性、肝細胞はhepatocyte陽性であるが、時間の経過とともに、CK7, hepatocyteを共発現する肝細胞が増加し、hepatocyte単独発現の幹細胞が混在する肝細胞索が目立つようになり、場所によってこの肝細胞索と増生細胆管の連続性が見られた。このことは、3者間の密接な関係を示唆するものであり、肝細胞から、CK7, hepatocyte共発現肝細胞を経て細胆管が形成されると考えられた。

II. 腎臓に関する研究

1. 腎生検症例を中心として、内外の施設の症例について、合同で検討、協議する活動を行った。

2. 腎の基本的構造解析として、著変を認めない43例の腎臓の剖検組織標本について形態学的解析を行い、腎臓の成長と経年変化について、動脈の太さと壁の厚さ、糸球体内容の変化に注目し検討した。その結果、動脈の内径は年齢とともに太くなり、動脈の外径はより大きくなること、糸球体毛細血管係蹄とメサングウム細胞は10歳以上では年とともに増加すること、腎重量が大きい例では単位面積当たりの保存糸球体数や尿管管数が少ないことを見出した。

III. 消化管に関する研究

1. 小型大腸癌におけるリンパ節転移危険因子について検討した。大腸pSM癌203病変、20mm以下進行癌62病変を用いた。pSM癌については、6項目の危険因子(肉眼的陥凹の有無、粘膜内増殖態度、SM浸潤度、浸潤部組織型、簇出の有無、脈管侵襲)を設定し、多変量解析をおこなった。特に脈管侵襲については、免疫染色を行い正確に評価した。pSM癌の最も重要な転移危険因子として取り上げられた項目は、D2-40, CD31, EVG染色により評価した脈管侵襲であることを見出した。

IV. 泌尿生殖器に関する研究

1. 腎細胞癌

嚢胞状腎癌に関する検討を行った。腫瘍全体が嚢胞状であるものから、一部が嚢胞状であるものまでのスペクトラムがあることがわかった。特に嚢胞状の部が50%以上である場合、転移例はなく、予後は極めて良好であることを見出した。両側性腎癌に関する検討では、当該25症例のうち、明らかに対側腎からの転移と考えられた例が7例、明らかに別

個に発生したと考えられる例が8例であった。骨形成を伴った腎細胞癌の報告を行った。改訂された腎癌取扱い規約にそって所見をとり、症例の集積をしている。また特に病期分類に変更があったので、過去症例の再評価を行っている。

2. 前立腺癌について

臨床癌における pAKT と ERG の発現の関連を検討した。pAKT は日本人前立腺癌の約半数、ERG は約 25% に発現しており、その発現強度には逆相関が見られた。したがってこの2つの癌化経路は独立したものであることが示唆された。また ERG の発現は欧米人の約半数の頻度であることより、癌化経路に関して人種差があることが示唆された。前立腺ラテント癌に関する研究では、最近の剖検例におけるラテント癌の頻度、癌体積、年齢などのデータを、過去に蓄積されたラテント癌症例（1980年代）と比較検討した結果、癌の出現頻度は倍増し、ことに大型の癌が増加していることが判明した。

V. 産婦人科領域に関する研究

1. 妊孕性温存を目的とするホルモン療法（MPA療法）施行類内膜腺癌の病理学的検索を行った。治療により細胞異型の減弱、腺の分泌像、間質の脱落膜様変化などが観察されるが、腺管増殖の基本構造には変化が乏しかった。少数の症例では分娩まで至った。しかし、ホルモン療法後の癌の組織診断基準が確定していない点と療法の中止時期の決定等、今後検討すべき点が残された。

2. 絨毛性疾患における TSSC3 と p57 染色の診断的、組織発生の意義について検討した。

VI. 乳腺に関する研究

1. 良悪境界病変 191 例を集積し検討した。同一症例において、良性（過形成）～悪性（非浸潤性乳管癌）にまで至る観察者間の診断不一致があることが判明した。特に管内性病変で辺縁部のみに筋上皮細胞が存在する症例でその傾向が強いことが見出された。

2. 乳癌の HER2 に関して、免疫染色による結果と FISH 法の比較検討を行った。

VII. その他の研究

1. 口腔領域重層扁平上皮由来の腫瘍性病変の dermokine 発現に関する研究を行い、正常口腔粘膜は、皮膚と異なる発現状態を示していること、腫瘍性病変においては腫瘍組織分化と密接な関係を有することを示した。

2. シャーガス病の 1 剖検例に関して検討し報告した。

3. 骨髄移植後の GVHD による全身変化に関して検討を行った。

「点検・評価」

基本的業務のうち、教育は病理学講座、診断は病院病理部が遂行するという役割分担は昨年度までと同様である。講座教員は主として医学部 3 年生、4 年生の講義と実習、3 年生の研究室配属、6 年生の選択実習に参画し、熱意をもって、きめ細かな教育を行った。ことに病理学総論実習（3 年生）、各論実習（4 年生）では例年通り、教授以下全教員がすべての実習（計 33 コマ）に参加し指導にあたった。病理部出向教員は術中迅速診断 613 件を含む 16,190 件の病理組織診断、16,726 件の細胞診断、57 件の病理解剖診断などの診断業務を担当し、日々正確で迅速な病理診断の提供を心がけ、一致団結して診断業務に邁進した。また臨床各科との症例検討会などを行うことにより、さらに臨床・患者に対して貢献した。

数年来続いていた人員不足もここ 2～3 年の入局者により、人数的には改善されてきた。ただし、いまだに分院の病理部においては外部からの診断応援を要請している状況にあり、この点は、今後改善していかなければならない点と考えられる。幸いなことに次年度も 3 名以上の入局が決定しており、若い力に大きな期待がよせられている。

以上のように講座と病理部で役割を分担し業務を遂行しているが、人員の関係からも専任ということとは不可能であり、実際は講座所属教員も院内病理診断業務の一部を担当し、病理部出向教員も実習や講義の一部に参加するということがおこなわれているのが実状である。講座と病理部で役割分担をしていることは矛盾した体制であるが、両者は病理を運営する上で車の両輪のようなものであり、両部門の現状を知っておくことは、教員個人にとっても有用なことであり、今後も継続すべきと考えられる。さらに人的資源を確保し、講座と、分院を含む病理部間の異動を積極的に推進することにより、病理としての組織全体の活性化やバランスの取れた人材の育成が可能となると考えられる。

現段階における問題点の 1 つとして、教育および診断業務に忙殺され、研究活動に十分な時間が割けないということがある。これは従来より解決しなければならない問題であり、また講座、病理部に共通した課題である。各人の不断の努力により、日々の

業務の中から専門分野における問題点を抽出し、研究計画を立て、研究を実施し、なんとか学会発表まではこぎつけるものの、その後の論文の執筆、投稿にまでなかなか至らず、次年度の学会発表の時期がきてしまう、という状況が続いている。個人が地道に努力することはもちろんだが、研究にもう少し時間を割けるような体制の変革が、講座・病理部全体に求められている。とはいえ、卒前・卒後教育や診療における病理のニーズはさらに年々高まってきており、診断業務においても、規約に沿った診断や多数の免疫組織化学染色を駆使したより細かい病理診断が日々要求されている。したがってこの変革は必ずしも簡単とは言えず、少なくとも数年単位の計画の上、十分な慎重さをもって進めていくべきことと思われる。医局員全員の叡智を結集し、今後に向けて検討をすべきときにきていると思われる。

研究業績

I. 原著論文

- 1) Yamaguchi Y (Yamaguchi Pathol Lab), Kanetsuna Y, Honda K (Tokyo Women's Med Univ), Yamanaka N (Tokyo Kidney Res Inst), Kawano M (Kanazawa Univ), Nagata M (Tsukuba Univ). Characteristic tubulointerstitial nephritis in IgG4-related disease. *Hum Pathol* 2012; 43(4) : 539-49.
- 2) Nakano M, Tanaka T, Nakamura A, Watanabe M, Kato N, Arai T, Jasegawa Y, Akiba T, Marushima H, Kanetsuna Y, Abe T. Multiple pulmonary metastases following total removal of a bilateral parasagittal meningioma with complete occlusion of the superior sagittal sinus: report of a case. *Case Rep Neurol Med* 2012; 2012: 121470.
- 3) Kanzaki G, Tsuboi N, Utsunomiya Y, Ikegami M, Shimizu A (Nippon Med School), Hosoya T. Distribution of glomerular density in different cortical zones of the human kidney. *Pathol Int* 2013; 63(3) : 169-75.
- 4) Ueno H¹⁾, Mochizuki H¹⁾, Akagi Y (Kurume Univ), Kusumi T (Keiyukai Sapporo Hosp), Yamada K (Takano Hosp), Ikegami M, Kawachi H²⁾, Kameoka S (Tokyo Women's Med Univ), Ohkura Y³⁾, Masaki T³⁾ (³Kyorin Univ), Kushima R (Shiga Univ), Takahashi K (Komagome Hosp), Ajioka Y (Niigata Univ), Hase K (Self Defense Forces Central Hosp), Ochiai A (National Cancer Center Hosp East), Wada R (Juntendo Univ), Iwaya K (Tokyo Med Univ), Shimazaki H¹⁾, Nakamura T^{1,4)} (¹National Defence Med Coll, ⁴RIKEN), Sugihara K²⁾ (²Tokyo Med Dental Univ). Optimal colorectal cancer staging criteria in TNM classification. *J Clin Oncol* 2012; 30(13) : 1519-26.
- 5) Tsuboi N, Utsunomiya Y, Kanzaki G, Koike K, Ikegami M, Kawamura T, Hosoya T. Low glomerular density with glomerulomegaly in obesity-related glomerulopathy. *Clin J Am Soc Nephrol* 2012; 7(5) : 735-41.
- 6) Kadota T, Shimizu K, Tsurushige C, Kawaishi M, Araya J, Nakayama K, Kuwano K, Hano H. Organizing pneumonia complicated by cyst and pneumothorax formation. *Intern Med* 2012; 51(22) : 3155-8.
- 7) Wakui S¹⁾, Takahashi H, Mutou T (Drug Safty Testing Center), Shirai M¹⁾, Jutabha P²⁾, Anzai N²⁾ (²Dokkyo Med Univ), Wempe MF (Univ of Colorado), Kansaku N¹⁾, Hano H, Inomata T¹⁾ (¹Azabu Univ), Endou H (J-Pharma). Atypical leydig cell hyperplasia in adult rats with low T and high LH induced by prenatal Di (n-butyl) phthalate exposure. *Toxicol Pathol* 2013; 41(3) : 480-6.
- 8) Kobayashi T, Ichiba T, Sakuyama T, Arakawa Y, Nagasaki E, Aiba K, Nogi H, Kawase K, Takeyama H, Toriumi Y, Uchida K, Kobayashi M, Kanehira C, Suzuki M, Ando N, Natori K, Kuraishi Y. Possible clinical cure of metastatic breast cancer: lessons from our 30-year experience with oligometastatic breast cancer patients and literature review. *Breast Cancer* 2012; 19(3) : 218-37.
- 9) Araya J, Kojima J, Takasaka, Ito S, Fujii S, Hara H, Yanagisawa H, Kobayashi K, Tsurushige C, Kawaishi M, Kamiya N, Hirano J, Odaka M, Morikawa T, Nishimura SL (California Univ), Kawabata Y (Saitama Univ), Hano H, Nakayama K, Kuwano K. Insufficient autophagy in idiopathic pulmonary fibrosis. *Am J Physiol Lung Cell Mol Physiol* 2013; 304(1) : L56-69.
- 10) Tateishi J, Sekine H, Ito K, Nakagawa H, Fukunaga M. Cutaneous composite hemangioendothelioma on the nose treated with electron beam. *Int J Dermatol* 2012 Sep 24. [Epub ahead of print]
- 11) Momotani E¹⁾, Romona NM¹⁾, Yoshihara K¹⁾, Momotani Y¹⁾ (¹National Inst Animal Health), Hori M²⁾, Ozaki H²⁾ (²Univ of Tokyo), Eda S (Univ of Tennessee), Ikegami M. Molecular pathogenesis of bovine paratuberculosis and human inflammatory bowel diseases. *Vet Immunol Immunopathol* 2012; 148(1-2) : 55-68.
- 12) Momotani E (Naitoanl Inst Animal Heal), Ozaki H¹⁾, Hori M¹⁾ (¹Univ of Tokyo), Yamamoto S²⁾, Kuribayashi T²⁾ (²Azabu Univ), Eda S (Univ of Ten-

- nessee), Ikegami M. Mycobacterium avium subsp. paratuberculosis lipophilic antigen causes Crohn's disease-type necrotizing colitis in Mice. Springerplus 2012; 1(1): 47.
- 13) Ueno H¹⁾, Mochizuki H¹⁾, Shirouzu K (Kurume Univ), Kusumi T (Keiyukai Sapporo Hosp), Yamada K (Takano Hosp), Ikegami M, Kawachi H²⁾, Kameoka S (Tokyo Women's Med Univ), Ohkura Y³⁾, Masaki T³⁾(³Kyorin Univ), Kushima R (Shiga Univ), Takahashi K (Komagome Hosp), Ajioka Y (Niigata Univ), Hase K (Self Defence Forces Central Hosp), Ochiai A (National Cancer Center Hosp East), Wada R (Juntendo Univ), Iwaya K (Tokyo Med Univ), Nakamura T¹⁾(¹National Defense Med Univ), Sugihara K²⁾(²Tokyo Med Dental Univ); Study Group for Tumor Deposits without Lymph Node Structure in Colorectal Cancer projected by the Japanese Society for Cancer of the Colon and Rectum. Multicenter study for optimal categorization of extramural tumor deposits for colorectal cancer staging. Ann Surg 2012; 255(4): 739-46.
- 14) 今村恵一郎, 菱沢利行, 村瀬鎮雄, 曾雌 茂, 上野豊, 間 浩通, 宮坂輝幸, 小池裕人. 最終診断が急速破壊型股関節症 (RDC) であった症例の治療経験. 埼玉医会誌 2012; 47(1): 312-6.
- 15) 渡嘉敷唯司, 稲葉夕子, 福田健志, 池上雅博, 石田祐一. 画像診断と病理 後腹膜奇形腫. 画像診断 2012; 32(8): 728-9.
- 16) 廣岡信一, 池上雅博, 野村浩一, 原田 徹, 古里文吾, 小山大河, 片木宏昭, 佐藤 峻, 柳沢春華. 【転移をきたす小さな大腸癌-本当に悪性の大腸癌とは?】「小さな大腸癌」の特徴 (病理の立場から) 小型大腸癌におけるリンパ節転移危険因子の検討. Intestine 2012; 16(4): 366-72.
- 17) 稲垣卓也, 羽野 寛, 森川利昭. 小葉中心性肺気腫の形態形成 弾性線維構築および血管構築変容の肺厚切標本および組織再構成による3次元元的観察. 慈恵医大誌 2012; 127(4): 129-39.
- 18) 田邊陽子¹⁾, 羽野 寛, 市ノ川義美¹⁾(¹帝京大), 松井 毅 (京都大). 口腔領域重層扁平上皮由来の腫瘍性病変の dermokine の発現に関する研究. 慈恵医大誌 2013; 128(2): 73-82.
- 19) 渡嘉敷唯司, 滝口沙世, 馬場 亮, 福永真治, 兼平 卓. 画像診断と病理 IPNB (intraductal papillary neoplasm of bile duct). 画像診断 2012; 32(10): 970-1.
- 20) 田代浩徳¹⁾, 福永真治, 片瀨秀隆¹⁾(¹熊本大). 【絨毛性疾患アップデート 「取扱い規約」改訂をふまえて】 絨毛性疾患の取扱い PSTT と ETT の取扱い. 臨婦産 2012; 66(8): 641-6.
- 21) 大谷友彦, 齊藤彰一, 池上雅博. 【エキスパートだけが知っている大腸内視鏡-挿入のコツと診断の基本-】 ケーススタディ (Case2) 腫瘍・非腫瘍の鑑別が困難な1例. 消内視鏡レクチャー 2012; 1(2): 357-62.
- 22) 中尾 裕, 齊藤彰一, 井出大資, 大谷友彦, 二上敏樹, 相原弘之, 池上雅博, 田尻久雄. 【知ってますか! SSA/P とその癌化】 LHP (large hyperplastic polyp) と SSA/P は同じか NBI の所見から. 消内視鏡 2012; 24(7): 1139-46.
- 23) 渡嘉敷唯司, 五十嵐隆朗, 矢萩裕一, 池上雅博. 画像診断と病理 乳腺原発悪性リンパ腫. 画像診断 2012; 32(13): 1222-3.
- 24) 渡嘉敷唯司, 倉田直樹, 池上雅博, 三木 淳. 画像診断と病理 腎細胞癌 (嫌色素細胞癌). 画像診断 2012; 32(14): 1356-7.
- 25) 中尾 裕, 齊藤彰一, 井出大資, 玉井尚人, 大谷友彦, 二上敏樹, 相原弘之, 池上雅博, 田尻久雄. 【SSA/P の本態を探る】 臨床診断の立場から NBI 観察を中心に. Intestine 2012; 16(6): 513-7.
- 26) Shirai M¹⁾, Wakui S¹⁾, Wempe MF¹⁾, Mutou T¹⁾, Oyama N¹⁾, Motohashi M¹⁾, Takahashi H, Kansaku N¹⁾, Asari M¹⁾, Hano H, Endou H¹⁾(¹Azabu Univ). Male sprague-dawley rats exposed to *in utero* Di (*n*-butyl) phthalate: dose dependent and age-related morphological changes in leydig cell smooth endoplasmic reticulum. Toxicol Pathology 2013; 41(7): 984-91. Epub 2013 Feb 15.
- 27) Fukunaga M. Immunohistochemistry for the imprint gene products TSSC3 to facilitate differential diagnosis of trophoblastic disease. Mod Pathol 2013; 26(S2): 275A.
- 28) Takahashi H, Furusato B, Kimura T, Okayasu M, Mizukami S, Egawa S, Hano H. Incidence and correlation of AKT and ERG expressions in Japanese prostate cancer. Mod Pathol 2012; 25(S2): 231A.
- 29) Furusato B, Takahashi H, Kimura T, Miki J, Mizukami S, Okayasu M, Yamamoto T, Kuruma H, Egawa S, Hano H. Detection of ERG in Japanese transition zone prostate cancer. Mod Pathol 2012; 25(S2): 205A.

II. 総 説

- 1) 福永真治. 【婦人科がん-最新の研究動向-】 絨毛性疾患 胎状奇胎の病理診断. 日臨 2012; 70(増刊4 婦人科がん): 707-10.
- 2) 池上雅博. 【図説 胃と腸用語集 2012】 病理 PG, NPG (polypoid growth, non polypoid growth). 胃と腸 2012; 47(5): 822.

- 3) 鷹橋浩幸, 古里文吾, 岡安美央子. 【泌尿器病理 I - 前立腺と腎臓 -】前立腺癌の予後予測因子. 病理と臨 2012 ; 30(9) : 936-40.
 - 4) 福永真治. 男性の子宮内膜症. 検と技 2012 ; 40(12) : 1397-8.
 - 5) 福永真治. 【卵巣明細胞腺癌と子宮内膜症 - 分子生物学的アプローチと治療戦略の展望】異型内膜症 atypical endometriosis の概念と卵巣明細胞腺癌. 産と婦 2012 ; 79(10) : 1233-7.
 - 6) 福永真治. 【婦人科がん - 最新の研究動向 -】子宮体がん 子宮体癌の臨床病理学 異型ポリープ状腺筋腫. 日臨 2012 ; 70(増刊 4 婦人科がん) : 332-5.
 - 7) 味岡洋一 (新潟大学), 大倉康男 (杏林大学), 池上雅博. 【次期改訂に向けて~大腸癌取扱い規約の改訂に望むこと~】「SM 浸潤距離」の評価, 標準化がなされているか 評価の現状と問題点. 大腸癌 Frontier 2012 ; 5(3) : 225-8.
- III. 学会発表**
- 1) 金網友木子. パルボウイルス感染症と腎病変. 第 55 回日本腎臓学会学術総会. 横浜, 6 月. [日腎会誌 2012 ; 54(3) : 266 ; 194]
 - 2) 金網友木子, 中野雅貴. 骨髄移植 6 年後に, 特異な組織像を示す Maviium 全身感染を来した 1 剖検例. 第 101 回日本病理学会総会. 東京, 4 月. [日病理会誌 2012 ; 101(1) : 321]
 - 3) 佐藤 峻, 鷹橋浩幸, 野村浩一, 福永真治, 古里文吾, 久岡正典, 松山篤二, 片木宏昭, 柳沢春華, 羽野寛, 池上雅博. Primitive neuroectodermal tumor (PNET) が示唆される前立腺原発円形細胞肉腫の 1 例. 第 101 回日本病理学会総会. 東京, 4 月. [日病理会誌 2012 ; 101(1) : 342]
 - 4) 古里文吾, 鷹橋浩幸, 木村高弘, 三木 淳, 山本順啓, 鎌田裕子, 大和田麻美子, 須藤明美, 岡安未央子, 水上齊之助, 小峯多雅, 鹿 智恵, 千葉諭, 鈴木正章, 穎川 晋, 羽野 寛. 前立腺癌における ETS 関連遺伝子タンパクの発現の検討. 第 101 回日本病理学会総会. 東京, 4 月. [日病理会誌 2012 ; 101(1) : 340]
 - 5) 鷹橋浩幸, 古里文吾, 岡安未央子, 水上齊之助, 羽野 寛. 日本人前立腺癌におけるリン酸化 AKT と ERG 遺伝子融合の関連. 第 101 回日本病理学会総会. 東京, 4 月. [日病理会誌 2012 ; 101(1) : 267]
 - 6) 片木宏昭, 柳沢春華, 佐藤 峻, 中村麻子, 小池裕人, 原田 徹, 野村浩一, 鷹橋浩幸, 羽野寛, 池上雅博. 直腸 goblet cell carcinoid に ganglion neuroma を合併した一例. 第 101 回日本病理学会総会. 東京, 4 月. [日病理会誌 2012 ; 101(1) : 385]
 - 7) 柳沢春華, 片木宏昭, 佐藤 峻, 中村麻子, 小池裕人, 原田 徹, 野村浩一, 古里文吾, 鈴木正章, 羽野寛, 池上雅博. 胃原発の Benign mesenchymal tumor の一例. 第 101 回日本病理学会総会. 東京, 4 月. [日病理会誌 2012 ; 101(1) : 308]
 - 8) 鹿 智恵, 水上齊之助, 稲垣卓也, 小峯多雅, 古里文吾, 須藤明美, 林 勇介, 柳沢春華, 片木宏昭, 佐藤 峻, 小池裕人, 原田 徹, 鷹橋浩幸, 千葉諭, 池上雅博, 羽野 寛. 原発性肝細胞がんの発生・転移における PROM1 の関連性について. 第 101 回日本病理学会総会. 東京, 4 月. [日病理会誌 2012 ; 101(1) : 265]
 - 9) 鹿 智恵, 羽野 寛, 池上雅博. Decreased expression of PROM1 protein is associated with carcinogenesis of hepatocellular carcinoma. 第 71 回日本癌学会学術総会. 札幌, 9 月. [日癌総会誌 2012 ; 71 回 : 81-2]
 - 10) 酒田昭彦. ミトコンドリア糖尿病における酸化ストレスの関与についての免疫組織化学的検討. 第 101 回日本病理学会総会. 東京, 4 月.
 - 11) 岡安未央子, 鷹橋浩幸, 加藤弘之, 古里征国, 古里文吾, 水上齊之助, 羽野 寛. PSA スクリーニング時代における前立腺ラテント癌の動向. 第 101 回日本病理学会総会. 東京, 4 月. [日病理会誌 2012 ; 101(1) : 340]
 - 12) 羽野 寛, 鈴木正章, 千葉諭, 鷹橋浩幸, 鹿 智恵, 小峯多雅, 古里文吾, 稲垣卓也. 非アルコール性脂肪性肝炎 (NASH) の中心静脈周囲線維化域における動脈の発達. 第 101 回日本病理学会総会. 東京, 4 月. [日病理会誌 2012 ; 101(1) : 365]
 - 13) 原田 徹, 柳沢春華, 佐藤 峻, 片木宏昭, 中村麻子, 小池裕人, 野村浩一, 池上雅博, 松本倫典, 矢永勝彦, 羽野 寛. 肝細胞癌発生の基盤となった非 B 非 C 型肝炎患および B 型肝炎既感染肝病変についての臨床病理学的検討. 第 101 回日本病理学会総会. 東京, 4 月. [日病理会誌 2012 ; 101(1) : 361]
 - 14) Fukunaga M. Paratesticular endometriosis in a man with a prolonged hormonal therapy for prostatic carcinoma. 第 101 回日本病理学会総会. 東京, 4 月. [日病理会誌 2012 ; 101(1) : 342]
 - 15) 土屋幸子, 梅沢 敬, 福村絢奈, 野村浩一, 池上雅博, 山田恭輔, 岡本愛光, 落合和徳. 豊富な粘液が BD シュアパスに及ぼす影響に関する検討. 第 53 回日本臨床細胞学会総会春季大会. 千葉, 6 月. [日臨細胞会誌 2012 ; 51(Suppl.1) : 395]
 - 16) 千葉諭, 古里文吾, 稲垣卓也, 小峯多雅, 鹿 智恵, 遠藤泰彦, 池上雅博, 鈴木正章, 羽野 寛. 解剖例による正常腎臓の光顕的組織計測 (第二報). 第 101 回日本病理学会総会. 東京, 4 月. [日病理会誌 2012 ; 101(1) : 332]
 - 17) 中尾 裕, 池上雅博, 齊藤彰一, 小川匡市. 鋸歯状

病変の診断と治療 鋸歯状構造を有する大腸病変の画像強調観察における内視鏡的特徴所見と病理学的特徴所見の検討. 第67回日本大腸肛門病学会学術集会. 福岡, 11月. [日大腸肛門病会誌 2012; 65(9): 561]

- 18) 大谷友彦, 田尻久雄, 池上雅博. 大腸EMR/ESDの現状と適応 腫瘍径20mm以上を有する大腸腫瘍における治療方針の検討. 第84回日本消化器内視鏡学会総会. 神戸, 10月. [Gastroenterol Endosc 2012; 54(Suppl.2): 2690]
- 19) 梅沢 敬, 野村浩一, 池上雅博, 山田恭輔, 岡本愛光, 落合和徳, 沢辺元司. 悪性との鑑別を要する細胞像 明日から使える鑑別のポイント! 直接塗抹・BDシユアバス標本における子宮頸部上皮内腺癌の多彩な細胞形態と鑑別診断. 第51回日本臨床細胞学会秋期大会. 新潟, 11月. [日臨細胞会誌 2012; 51(Suppl. 2): 641]
- 20) 中野雅貴, 金網友木子. ステロイド治療中止後に再発した肉芽腫性間質性腎炎の一例. 第101回日本病理学会総会. 東京, 4月. [日病理会誌 2012; 101(1): 334]

告書 (研究実績報告書). 2012.

IV. 著 書

- 1) 福永真治. 第2部: 組織型と診断の実際 II. 性索間質性腫瘍 3. 混合型性索間質性腫瘍. 本山第一 (山形大学), 坂本穆彦 (大森赤十字病院) 編. 卵巣腫瘍: 腫瘍病理鑑別診断アトラス. 東京: 文光堂, 2012. p.102-5.

V. その他

- 1) 梅沢 敬, 野村浩一, 土屋幸子, 芦川智美, 福村絢奈, 池上雅博. Serous endometrial intraepithelial carcinoma の1例. 日臨細胞会誌 2012; 51(3): 188-91.
- 2) 相原弘之, 斉藤彰一, 大谷友彦, 鈴木武志, 加藤智弘, 田尻久雄, 池上雅博. 早期胃癌研究会症例 特異な肉眼型を呈し, 通常内視鏡と拡大内視鏡による深達度診断が乖離した早期大腸癌の1例. 胃と腸 2012; 47(4): 579-85.
- 3) 横須賀淳, 瀧川真吾, 小池和彦, 鳥巢勇一, 貞岡俊一, 高木一郎, 田尻久雄, 羽野 寛. 腫瘍生検にて細胆管細胞癌と考えられ, IVR 治療を施行した1例. 肝臓 2012; 53(12): 829-38.
- 4) 横須賀淳, 石川智久, 中尾 裕, 猿田雅之, 穂刈厚史, 小池和彦, 北原拓也, 原田 徹, 羽野 寛, 田尻久雄. 多発筋炎の診断時に原発性胆汁性肝硬変の併発を認めた1症例. 肝臓 2012; 53(4): 216-24.
- 5) 鹿 智恵. 肝細胞がんの発生・進展に関連する責任遺伝子の同定. 平成23年度科学研究費補助金実績報告書 (研究実績報告書). 2012.